



TITLE:

<批評・紹介>中國近代工業史の研究 波多野善大著

AUTHOR(S):

村松, 祐次

CITATION:

村松, 祐次. <批評・紹介>中國近代工業史の研究 波多野善大著. 東洋史研究 1961, 20(2): 93-98

ISSUE DATE:

1961-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/148211>

RIGHT:

にでてくるのであって、説明がないというのでは決してない。

本書のようにその内容が廣範にわたるものの書評は、當然豊かな學殖と廣い視野とをもつ方が擔當されるべきであり、筆者などとはとうていその任にたえるものではないのであるが、さきに書評を依頼された方によんどころない事情があり、急に筆者があたるようになった。本辭典の眞價を誤り傳えたところはなかったかとおそれる次第である。

(越智重明)

中國近代工業史の研究

波多野 善 大著

昭和三十六年五月 東洋史研究會刊

A5版 本文五五六頁 索引三二頁

一

波多野善大氏の新著を讀了して、先ず受けた印象は、内容が豊富で、しかも新鮮だということであった。中國近代工業の初期の發展に關し、取上げらるべき重要な問題はほとんど残りなくここに論及されている。所説は十分な史料の提示によつて裏づけられている。アヘン戰爭前から、辛亥革命直前に至る蓄積・投資・産業化の諸問題は、中國に固有な政治・社會的風土との關連に於てのみならず、又より廣大な比較史的視野の下に整序されて、多くの新しい論點と示唆とを提供している。波多野氏の長年にわたる精勵の成果が、内容にふさわしい立派な印刷や裝訂を得て出版せられたことを祝し、この事に與かり援助せられた東洋史研究會や、哈佛燕京研究所に心

から敬意を表する。

二

先ず内容の紹介からはじめよう。六つの章から成つていて、その一部は獨立の論稿として既に公刊せられた。すなわち、

一 アヘン戰爭前における資本の形態
二 中國輸出茶の生産構造

三 アヘン戰爭後における近代資本の發展

四 上海機器織布局の創立とそれをめぐる問題

五 漢陽製鐵所の設立發展と鐵道問題

六 アヘン戰爭後における棉織の生産形態

の六章である。一と二とは主としてアヘン戰爭以前について、三以下はそれ以後について述べている。いずれの場合にも先ず展望的な概觀(一と三)が行われて、これに詳細な個々の分野の研究がつづく形になっている。

先ず第一章では、アヘン戰爭と南京條約とによつて、「近代的産業資本の形成」がはじまる以前の中國における、「資本形態」の分析が行われる。官僚による中飽利益の追求、商人による地方的・季節的價格差の裁定や、專賣獨占、高利貸經營等の實態を、明清の社會に跡づけ、そのような諸源泉からの蓄積の進行に平行するものとして、農村における商品生産の擴大と手工業、特に織布業の發展や西洋のソキエタスおよびコメンダに比せらるべき、合股・隱名合股の投資制度の展開が、問題にせられる。勿論明以來の租稅銀納が、農業セクターに貨幣經濟を強制擴大してゆく作用や、新大陸銀流入のインフレーション作用のような、外在的要因の存在をも指摘する

のであるが、なおかつ著者の主要關心は、やはり中國經濟内部における生産力と、餘剰移轉關係と、これに伴なう生産組織・經營形態の相關的發展にあつたようである。そしてそこには發展の一般的普遍的圖式を、中國についても跡づけようという意慾が隠顯するのであるが、しかも著者は又第一章の「結語」においては、そのような推移に拘らず、何故に、それが中國に「産業革命をもたらさなかつたか」という形で、中國的發展の固有性を問題にせられるのである。そして蓄積の土地や、商業的・金融的分野のみへの投下によって起る舊秩序の靜態的再生産という、在來の説明をしりぞけ、一方では農民に對する商業化の進展や、問屋制商業資本による手工業の組織化によって、「地主の全人格的な佃戸支配の不可能化」が起りつつあることを指摘しながら、同時に中國ではそのような商業的、問屋的な要素が、地主的・高利貸的な要素と、構造的に緊密に結合していたために、商業化が封建的なものの基盤をつきくずすよりは、むしろ抗拒運動によって動搖しつつあった地主的秩序を補強する作用をしたのだ、と解釋されるのである。(六二頁)

第二章は茶につき、宋以來の專賣制の經過や、東印度會社貿易の推移を概観し、つづいて、輸出茶の銘柄・生産・加工・販運の機構を考證したものである。茶葉の直接生産者である「山戸」と共に、茶葉の撰別・加工・包装のためのマニファクチュアを經營し、同時に原料生産者に對して資本前貸を行う「茶莊」や、「行商」が、著者の前「近代」的な資本形態の一例として、提示されたわけであらう。

これに對して第三章以下は、そのような資本の舊形態に對比せらるべき、アヘン戰爭以後の「新資本の形成」と「近代産業の發展」について述べる。何が「近代産業」であり、「近代産業資本」であるかは、定義的には明らかにされていない。しかし先ず第三章では、アヘン戰爭後重要になる新しい資本蓄積の源泉として、租界商人・買辦・華僑・洋務派官僚を擧げる。彼らは又早くから海外の新風氣に接して、重要なイノヴェーターにもなるのである。そして太平天國亂以後全體としての商末思想の清算を背景に、次々に設立せられて行つた官營軍事工業、各種の官督商辦、官商合辦、および商辦の諸企業について、企業史的な展望が試みられる。それは無機動力に依存する大規模な工場制企業であり、鐵と石炭との生産を基礎に郵便や電信や汽船や鐵道を外部經濟として隨伴しながら、株式會社制度の普及を一つの條件にして、設立せられる産業經營である。それが著者のいわゆるアヘン戰爭前の資本形態に比べて、形態的に全く新しいものであり、志向的に全く新しいねらいをもつものであったことは、明らかである。著者が本書の冒頭に第一・二章を置いて、それと第三章以下との間に示そうとした對比の効果は十分だ、といわなくてはならない。しかしそれならばそのような舊體制と新秩序との連續性はどうかであらうか。

著者は特に第三章の末尾に、「形成期における近代的企業資本の諸特色」なる一節を設けて、1 企業組織が官營から、次第に商辦に向うにつれ、民間資本が國家資本に代位してゆく傾向が見られるが、その民間資本の集中は、合股的な地縁血縁關係に制約せられて圓滑にゆかず、巨額の資本を要する鐵道建設などの場合には、錢糧に附徹したり小作料に割りつけたり鹽價に附加したり、之を要する

に權力の強制によらざるをえなかったこと、2「近代的な企業組織としての株式會社を成立させる近代的な基盤」が排除してゐたために、そこに設立せられたいわゆる「株式會社」制度には「官利」「優先股」の如き不合理な舊制度が残存して、それが産業化の進展を妨げたこと、3日清戦争・義和團事件の賠償金支拂、外國人企業および外國產商品からの競争等、累積する惡條件が、南洋華僑からの送金や、當時の日本に比べてさへ低かつた低賃銀労働の存在等、資本に取つては有利な諸條件の存在にも拘らず、民族資本の自律と發展とを不可能にしたことを述べている。それらはいずれもたしかに同治以來の、上からの産業化運動を失敗に歸せしめた諸原因であつて、第四章以下はこれについての個別的な研究をなすのである。

先ず第四章は外國人に對し、はじめて中國内地へ機械を輸入し、設廠製造する權利を與えた、日清下關條約第六條四項成立の背景として、上海織布局の設立と清國側、外國側、日本側のこの問題に對する態度を論究する。特に當時なお資本化と産業化の初期段階にあり、中國に對する資本輸出の要求を、それほど強く感じていたと思われぬ日本が、この様な條項を要求し獲得した事情は何だつたかを問題にせられるのである。先ず當時の外國人工業權に關する紛争を激化せしめた條件はどのようなものだったか。

一八五八年の清佛條約、一八六一年の清獨條約、一八六五年の清白條約等にくまれた外國人工業權に關する條項を繞つて、清國とアメリカ・イギリス・ドイツとの間には、くり返して條文解釋上の論争が起つたのみならず、清國側は開港場における外國資本工業、特に紡績業にきびしい彈壓を加えた。それは一八七八年以來計畫され、鄭觀應等によつて楊樹浦に設立された上海織布局を保護するた

めであつた。この織布局は洋務派官僚を代表する李鴻章の庇護と推挽の下に成立し、税制上の特典と共に、はじめから十年間競争企業の設定を制限する獨占特權を與えられていた。清國側の態度は一般に民族産業を保護するというよりも、特にこの特定の企業を守ることに急であつた。しかも外國側には、又その頃特に資本輸出を強行せざるをえぬ事情があつた。一八八〇年代の銀價低落以後、中國市場に對する西歐諸國から棉製品の出は、(一)中國自身の購買力收縮により、(二)インド・日本等の銀本位國の低爲替輸出からの競争により、二重の打撃を受けた。イギリス等の資本輸出は、この爲替上の不利益を回避するために、國境をこえて産業を銀本位國内部に移す試みであつた。以上の點についての著者の考證・分析は鮮かであり明快である。所で日本の立場はどのようなものだったか。日本は紡績業の勃興期に際して、日本產の原棉よりも長纖維で、しかも低廉な中國產棉花の輸入を必要としていた。そしてそのためには中國に繰綿工場を設立して、中國棉を繰綿にして舶載することが、採算上有利であつた。滋澤榮一の勢力下にあつた大阪紡績、次いで三井物産が、政府に内地設廠製造權獲得のための壓力をかけたのは、このような事情に基づくものであつた。従つて日本は列國のこの點に關する關心を知悉し、これを自國の目的に利用することはあつたにしても、同時に日本獨自の立場からこの權利を渴望する理由も又存したので、日本には當時この點に對する何らの正常な動機もなく、下關における日本の要求はイギリス外交官の示唆に基づくものだ、というような説は、信ずるに足りまい、というのが著者の論點である。外交史上の事實の有無は、外交史料を通じて考證論議されなくてはなるまいが、しかし日本も又この點につき經濟的な關心を

もつていたことは、著者の言う通りであらうと思う。

第四章が中國の産業化に重大な制約を加えた外國人資本の進出に關するものであったのに對して、第五章は清末洋務派官僚による鐵工業、鐵道業の建設を取扱い、これを通じていわゆる鐵道國有化政策の背景を探ろうとする。それは一面では清末官僚産業化運動の積極面をカウプすると共に、それが遂に辛亥革命の動亂に導かれざるを得なかった事情にもふれようとするのである。張之洞は一八八八年以來、經濟流通の圓滑化と軍事的な機動力増大を目的として、國內幹線鐵道の建設を唱導し、その勅許を得、兩廣總督から湖廣總督に轉じた。そして一方では當時勃興しつつあった官營軍事工業に原料を供給すると共に、鐵道建設の必要資材を自給するために、製鐵業の建設をも企てたのである。彼は湖廣總督着任と同時に、蘆漢鐵道建設費として戶部から支出せられた二百萬テールを用い、すでに廣東からイギリスに發注していた機械を利用して、漢陽製鐵所の建造に着手した。又大冶の鐵鑛・興國のマンガ・萍鄉の石炭その他の原料資源開發も、これに隨伴して行われた。しかし間もなく一八九〇年には鮮滿をめぐる國際情勢の急迫化によって、東三省の鐵道建設と陸海兩軍の擴大強化のために、蘆漢鐵道建設費の中央支出は打ち切れ、張之洞の計畫は重大な資金の困難に直面した。そこには當時極東外交の焦點をなしていた日露・英露の角逐と共に、張之洞と彼に對立する李鴻章の勢力との争克がからみ、複雑微妙な推移を示すのである。間もなく日清戦争に敗けると、李鴻章は一時失脚する。しかしこれによって張の計畫が推進せられる前に、清國は對日賠償債務を負うて極度の財政惡化を來し、彼の建設計畫も又一層はげしい窮乏を強いられることになる。反面敗戦によって弱體を露呈

した清國に對しては、列強の鐵道鑛山權獲得競争が起る。そしてこのような狀況の下で張之洞は、一八九五年に二度蘆漢鐵道の建設を建言し、外國資本支配の危險を警戒しながら、なお外國資本の導入を許して、早急に建設を終ろうとするのである。彼は又蘇杭甬・滬寧兩鐵道の建設にも外資を入れることを奏請した。勿論外國資本を導入しようとする張之洞に對する強い反對があった。しかしこれに代るべき當時のいわゆる「商股」も又、Chartered Bankをはじめとする外國資本のダミイにすぎぬことが查明せられた。結局一八九六年、張と、李鴻章の舊幕僚であった盛宣懷とを中心に、上海に鐵路總公司を設立し、南北洋政府から三百萬テール、商股七百萬テールの外、外國借款三千萬テールを集めて、鐵路建設を強行することになった。前後していよいよ經營の惡化した漢陽の製鐵廠についても、拂下又は外資導入が問題になり、これも併せて盛宣懷の手に委ねられるのである。所で鐵路建設費四千萬テールの二割弱を占める商股の募集は、全く失敗であつた。この部分をもふくめて外國資本借入必要額は尨大なものになったので、張と盛とは先ず政府出資を以て蘆漢・淞滬鐵道の建設を開始し、既建設分を擔保に、外資を入れようとしたのである。ただ當時英・米・獨・佛諸國の銀行資本は、いずれも中國に鐵道借款を供與し、これによりその勢力範圍を基點として中國を貫通する權益鐵道を建設せんとしつつあつたから、張之洞はそれらの「大國」を避けて小國ベルギーと借款契約を結んだ。尤も間もなくベルギー資本の實體はフランス資本・ロシア資本で、その究極の目的が東清鐵道と雲南鐵道との連結にあることが判明した。露佛兩國の成功が列強を刺激して、粵漢(米)・正太(露)・滬寧(英)・道清(英)等の鐵道借款契約が次々に成立した。そ

れらは概ね中國側に名目的な管理權と、利益の一部を與えるのみで、元利返済までは外國人が事實上經營權・會計權を全面的に掌握するものであったが、ただ所要の資材については、漢陽製品が優先購入せられたので、盛宣懷および鐵廠に關する限り、有利な新市場の開拓を意味した。ところが一九〇四年になり、ベルギーシンデルイトが、粵漢線の契約を獲得した啓興公司の株を買收して、事實上北京から廣東に至る全線の利權を掌握しようとしたことを契機に、湖南の官紳に從來の借款契約の廢棄を主張する者が多く、又會々日露戰爭における日本の勝利に刺激されて、民族主義思潮が勃興したので、粵漢線の利權は結局イギリスの援助で、中國人の手に回收せられた。日清戰爭後李と共に開戰の責任を分擔した袁世凱が、次第に北洋に勢力を得たり、これによって盛宣懷が壓迫されて督辦鐵路大臣を罷めたり、中國に自辦鐵道の運動が起つたりしても、問題全體の所在はほぼ同じである。一方には極度の財政難に悩み、鐵道建設に軍事上經濟上の要求ばかりでなく、又財政收入の一源泉を見出すとしてゐる清國政府があり、他方にはそのような借款の供與をめぐつて利權獲得のために競争する列強がある。官僚として國家の利害に隨順するという動機他にも、漢陽鐵廠の販路を擴大するために、外國借款による鐵道建設を推進せんとする盛宣懷に對して、民族主義思潮とその又背後にある各種の利害關係の錯綜がある。著者は當然に清末の鐵道、鐵鋼建設の問題を、單に經濟的な觀點からだけではなく、政治・社會的な關連の中で見直して、やがて宣統帝の即位により袁世凱が失脚すると共に、盛宣懷が鐵道國有化（借款擔保化）の政策をすすめて、これに對して鐵路風潮が起る歴史的な環境を、浮彫りにするのである。

最後の第六章は「アヘン戰爭後の棉織の生産形態」に關するものである。棉織といつてもそこで先ず問題にされるのは、土布の土法生産なのであつて、従つてそこには第四章・第五章の場合のような政治史・外交史上の大事件とのめざましい關連關係は指摘せられない。著者は中國社會の基底部を形成する農村・市鎮について、アヘン戰爭後の棉糸布、特に棉糸の輸入増加が與えた影響、バツタン・足踏・力織機の導入が、これに與えた改新の程度につき、考證せられるのである。外國棉糸の輸入は、在來設備による土布の生産を刺激して、「マニユ的な組織」を増加せしめ、各種の原料前貸制度を發生せしめた。新織機の輸入は二〇世紀の初頭以來、一層廣い地域に「マニユ工場」を續々出現せしめ、特に第一次大戰中にこの傾向が著しかった。しかも南開大學調査をふくむ多數の現代資料を援用して、著者は第一次大戰後においてもなお、紡績糸のみならず手紡糸を原料にして、バツタン・足踏機によつて織られる土布の生産は、工場制・力織機によるものよりはるかに多く、全般的に見て織布部門は、まだ手工業段階にあつたのだと判斷せられるのである。

四

却説ほぼ以上の如きものが五六〇頁の大冊を通讀して、自分に讀み取れた本書の論點の概要である。勿論本書のよきは、右のようなスケッチ的な要約によつては、傳え難いものが多い。どんな論點が提示されるべきであるかについてよりも、どれほどのどんな史料をどう驅使して、そうすべきかについて、本書は讀者に教え、裨益せしめる所が多いと思われるからである。しかしそのことを別にしても、中國の産業發達史について、考えるべき諸側面が、實に周到に

取上られていることをあらためて感じる。アヘン戦争前の状態も、これにつづく外國勢力の侵透の影響も、太平天國亂以後の官人による産業化の試みも、その總社會的な効果も、考察されている。考察は勿論著しい、代表的な一面について行われるわけであるが、しかもそのような點描は全貌を「理解」せしめるのに十分な、要點についてなされている。さらに一步を進めてそのような諸側面を一つの歴史畫像に連結し、これをより鮮明なものに要約することも、勿論精勵な著者によつて遠からず實現せられるであらうことを期待してこの稿を終る。

(村松祐次)

Paul Pelliot, Notes on Marco Polo I,
Imprimerie Nationale
Librairie Adrien-Maisonneuve, Paris 1969.

本書に關しては、すでに榎教授による詳しい批評と紹介(東洋學報第四三卷第三號)が出されており、今更あらためてつけ加えるべきものもないが、最近ペリオ氏の遺稿がつぎつぎと出版されながら、わが國にはまだ限られた數しか來ておらないようでもあり、羽田教授の「カルムック史料校註」紹介とともに、このすぐれた本書を廣く紹介することも無意味ではないと思われるので、いささか感想を述べて見たいと思う。

今日、マルコ・ポーロの「東方見聞錄」が世界史的意義を持つことは、あまりにも有名な事實である。しかし一般には、それが我が

國をも含めて東アジアと云うこれまであまり知られていなかった世界を當時のヨーロッパ人に紹介したこと、またそれが後にコロンブスのアメリカ大陸發見を誘發させたことなど、云はばその影響のみが強調されている恐れがないわけではない。我々東洋學を學ぶ者としては、まづ「東方見聞錄」に記されている事實そのものの學術的な面を研究の對象として考えて見なければならぬ。

これまでの研究によれば、「東方見聞錄」は普通の單なる旅行記と異つて、ポーロ自身が旅行中に詳しいメモを取り、それにもとづいて記されているため驚くべき程正確な部分が多く、しかも他の史料には見られない事實が記されているため、純粋な史料として學問的にも價値の高いものとされている。

しかしながら、今日そのテキストには種々あつて、各々異同があり、しかもやはり異國人の見聞錄であるため、なかには誤りを犯したものもある。またこれまで疑問のまま未解決に終っている箇所も少くない。著者ペリオ氏は英國のマウル氏と研究を共にしながら、この「東方見聞錄」に出て来る、人名・地名をはじめ重要な項目について、「元朝秘史」・「元史」・ラシッドの「集史」など根本史料はもとより、出來うる限りの關係史料をあつめ、さらにこれまでそれらについて行われた研究をも参照して、あらゆる面から詳細にわたつて研究したものである。そして、その結果を辭典的にアルファベット順に配列した。従つて、本書はマルコ・ポーロ研究には必要欠くべからざるものであり、最も基礎的な研究であると云える。

そればかりでなく、ポーロが誤つた所は、その誤つた理由を明快にしかも甚だ興味深く解明し、又説明の足りない所は他の史料から補つて充分に説明を加えている。なかには詳細のあまり、チンギス